ヨハネの福音書　１０章

2012/06/30

書記：Φ

<review>

Q.9章41節でファリサイ人たちには何が見えていたとイエスは言っているのか、またその見えたものに対しファリサイ人はどのような態度をとっていたのか。

宮：素晴らしいマサキくんに。

♪：むん？何が見えていたか。。。これ、新たに創作しちゃってもいいですか？

全員：おおっ

♪：パリサイ人たちは「俺達は神の言葉を知っている。」と言っていたけれども、言っていたけれども、言っていたけれども（ここ重要）！！！実はまだまだだった。もっと、こう、あくなき探究をすればもっと深い理解ができたのに・・・。

全員：素晴らしい。

Q1.「強盗」「門」「羊飼い」「羊」とはそれぞれ誰のことか。また、羊が「その声を知っている」とはどういう意味か。



宮：上に私が慣れないペイントで作ったおぞましい図があります。これで羊飼いのことがよくわかるかなと。羊飼いの流れは、日中は牧草地で羊を放牧してるけれども、日が暮れると柵の中に入れる。という感じです。

ということで、聞いていこうと思いますが。

目：強盗はパリサイ派の人々だと思います。

塁：９節で私は門ですっていってるので、イエス。「私の前に来た人はみな」とかいてあるからそれまでに現れた預言者のことかなとか考えたのですが」

ｈ「羊飼いは多分、神様のことじゃないかな。神様のもとに壁を乗り越えて入ってくるような強盗のパリサイ人はだめだよとか書いてあるから。でも、イエスは自分で「私は良い羊飼いです」と言っているので

宮：「では、書記で忙しいですか大丈夫ですか？吉永？」

Φ：「大丈夫です（どやっ）羊は人々だと思います。」

宮：８節のところを見ると、「前に来た人々」は自分の利益のために人々を先導した人々ではないかなと。羊飼いとは、イエスかなとは思うけれども、ｈ兄の言うように神だとも思うし。まあ、どっちでもよくね？

水口先生：神とイエスは一体だということで、どちらの意見も非常に重要なものだね。

水口先生：ここを英語で読んでください、岡本くん

～＠兄の流暢な朗読～

＠：ア・グッド・シパー・・・

水口先生：シェパードだね。

＠：あ、そっか、シー・シェパード・・・。

全員：それはちがう。

♀：雇い人って誰だろう？

宮：そうですね、ここは一体誰なのでしょう。岡本くん。

＠：パリサイ人だと思うのですけれども、そこで新たな疑問が生まれてしまって、狼って誰なのだろうと。

宮：では、狼は何を指しているのでしょう？

♀：狼は裁きの時だとか、緊急事態的なものだと思う。

宮：そうですね。ここは非常事態の比喩ではないかなと思いますね。

塁：囲いとは一体何でしょう？

F：おそらく、異邦人ではないかなと。

宮：それはどうしてですか？

F：まあ、その、大体こういうのって・・・フィーリング？

宮：おおう。

宮：囲いの中の羊とは？

♀：話を聞いている民衆であり、ユダヤ人たちです。

宮：そうですね。同じ神を信じている民衆というのが妥当だと思われますね。

水口先生：この１６節の言葉を皆はどう読みますか？

♪：むーん・・・。パッと思ったのは、イエスってこう、全世界の人をあまねく愛してくれているんだなと。自分は結構共同体主義に走りがちで、自分の周りの人が良ければそれでいいなとか、全く関係ない人のことは無関心でいるなあと。でも、イエスは見知らぬ人まで考えているのがすごいなとかいう感じを受けました。

目：正直、イエスさんは大変だなあと、導かなければいけない使命に追われていて、見知らぬ人のことまで動かなければいけないのだなあと。

宮：そうですね、

塁：キリストを頑張ってるのは分かるんですけど、勝手に自己犠牲するとかちょっと重いなと。素晴らしいという感じよりは、押し付けがましいような気がして、時代の流れ的なものもあるのかもしれないですけれども。

ｈ：囲いの中に属さない羊たちが本当に慎重なんだなと。日本だったらいっぱい神様いるからこんなことしないなあと。伝統的な日本人の考え方とは違うなあと。

宮：確かに、文化の差とか見えたりして面白いですね。

う：イスラエルの人々は神に選ばれたということでプライドもあるし、その人達を救うのは当たり前。異邦人なんかが救われるなんかとんでもないと思っていた時代にこんな言葉を発しているとはすごいことだなと。

水口先生：まさにここにイエス・キリストってどういう人格の持ち主なのかということがここに示されている。時代的なことを考えると、すごいradicalな人ですね。この一節はすごいsensationalな部分だと思いますね。

Q2.良い羊飼いと悪い羊飼いの違いとは具体的に何か。

宮：悪い羊飼いとはさっきの雇い人と同じ事だと思うのですが、ここについてはどう思いますか？

Φ：悪い羊飼いとは緊急事態で逃げてしまう者。

＠：そもそも、羊飼いが羊を飼っているのはなぜか！？それは、羊を育ててウールや乳や肉を手に入れるために飼っている。としたら、雇い人も良い羊飼いも同じ「羊」という資本を活用しているので、両者に特に違いは無いと思います。

♀：雇い人は自分の仕事だからやってるだけ。良い羊飼いの方は、、、うん。なんかそんな感じです。

SQ.良い羊飼いであるための条件を満たすような人は地上に存在するのだろうか。いるとすればどのような人だろうか。

♀：あ、思い出しました。羊を救うことが自分の利益に直結するかどうか。人々を救うことが自分の利益になるような人が良い羊飼い。

＠：命を捨ててしまったら、利益を得られないじゃないですか？命を捨てた後、羊はどうなるんでしょう？夜になったら狼に追い回されるようなきがするのですが・・・。良い羊飼いの再定義が必要かと思うのですが。

F：２８節に永遠の命を与えるって書いてますよ。だから、狼に食われないんじゃないすか？

＠：でも、羊飼いがいなかったら、毛を刈ってくれる人がいないから大変ですね。羊は。

宮：人を助けることが生きる目的となり得る人はいると思いますか？

目：マザー・テレサ的な人？

全員：おおっ

＠：シュバイツァーなんかもそうじゃないすか？密林の聖者、シュバイツァー。

Φ：（そういう肩書きがつくと厨二っぽいな）

＠：野口英世とか

塁：あいつ単に黄熱病で死んだだけじゃね？

Φ：（ああ、無駄死にか）

＠：ああ、そうか。じゃあなかなかいないかも。

う：逃げた人の代わりに犠牲になった神父がいるらしいわよ。

＠：架空の人物であれば・・・。

塁：もはや、クリスチャンじゃない。

＠：セリヌンティウスだ

目：でも、それは友人だからじゃね？

＠：ああ、そか。

宮：なかなかこういう人っていないかなと思ったのですが、色々出てきたので新鮮な感じです。

水口先生：羊飼いと羊の例を出したのは非常に重要なこと。羊飼いとは何か、羊とは何かというのを考えるのが重要。１３節に雇い人との比較の中で、雇い人はこころにかけてない、つまり、関心を持っていない。しかし、羊飼いたるイエスは関心を持っている。関心をもっているかどうかが生きる上で非常に重要なことなのです。羊飼いが死んじゃったらダメじゃないかという＠兄の発言に対して、それは本当に最もなことなのだけれども、死んだだけなら無責任じゃないか、毛を刈ってくれる人がいなくなるじゃないか、ということになるけれども、聖書ではイエスはもう一度生き返っている。今も生きているから、イエスは毛を刈ってくれるのですね。だから、イエスに感謝して生きていけると思うんですね。宮兄のSQに対して、こんなひとはいないと思っていたのでしょう？人を見るときに、その人を聖人として見るのは結構危ないことで、聖人としてみると、自分にはできない人、自分とは離れた人だと考えてしまう。祭りあげてしまう。しかし、立派な人の中にも影があって、不完全なところがある。そういったことを考慮した上で真の羊飼いであると考えたほうがいいですね。だから、真の羊飼いについて掘り下げる事は非常に重要なことだと思いますね。

<note>

神殿奉献記念祭：新約聖書ではここにしか記述が無い。昔、セレウコス朝シリアの王がユダヤ教を嫌いエルサレム神殿の祭壇を壊したため、これに激怒したユダヤ人が祭壇を奪回、神殿を聖別し再奉献した。以後この出来事を記念し冬の１２月の祭典として行われていた